春雷

春雷

K

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19495101

R-18, エク霊, 守エク霊, モブ霊, 霊幻総受け

Twitterでスレッド公開してましたが安定しないのでpixivに移します。

エク霊とモブ霊ごちゃ混ぜ物語です。
皆様曰く、エクボVSモブの霊幻争奪戦前夜ネトリだそうです（わかってなくて書いちゃった）

Table of Contents

春雷

どさり、と三和土に落ちる鞄とコンビニのビニール袋。
荒々しく脱がれた革靴が揃いもせず脱ぎ散らかされて方々を向き、部屋に続く短いフローリングの廊下で壁に上半身をダンと押し付けられる。
手首を壁に縫い止められて、自分よりも上背の三白眼に上から影を落とされ、強引に唇を奪われる。
「はっ、む、ま、待って、えく、んッ」
重なる唇とその柔肉をなぞる舌。焦る吐息が混ざり合い、切なげに漏れる声がその舌に絡め取られてそのまま口腔内へと押し込まれていく。
並びの良い歯列を舌先でなぞって下顎のふかふかな肉に溜まる唾液を味わって、奥に逃げる舌を追い回して捕らえて舐り、上顎をずるりとくすぐる。ほんのりと苦しげに眉を顰める至近距離の愛らしい表情に、エクボは片時も見逃すまいと凝視する。
柔らかな唇の感触を楽しむ余裕もなく、舐めて喰んで押し付けて、ぢゅ、と淫らな音を立ててようやく解放されたそこは互いの唾液で濡れそぼってぬらりと怪しく光った。
その勢いを失わないようにと、エクボの唇が霊幻のうなじに吸い付く。甘い柑橘と肌の匂いが上質なフェロモンとなって、無いはずの性慾をぐんと掻き立てた。

時は春先、3月のこと。
桜舞い散る川辺の歩道。
時折ジョギングや散歩を楽しむ人々とすれ違いながら、霊幻は愛しい存在と距離を置いて歩む。
ポケットに手を突っ込んでいかにも退屈そうな素振りを見せながらも、満開の薄桃色と青空のコントラストをため息をつきながら嗜む。少し先を歩くその対象は振り向いて、嬉しそうにはにかむ。

師匠、僕大学ちゃんと受かりました。

そうだな、おめでとうモブ、と目を細めて笑う。
きらきらと輝くその若さが、薫る青い春が、桜吹雪と共に霊幻の鼻先を掠めて飛んでいく。
この通りも、何度お前と歩いただろう。
緑生茂る初夏、蝉時雨の猛暑、高く薄い青空の初秋、紅葉咲き乱れる晩秋、息が凍りつく初冬、純銀に彩られた極寒の冬、そして。
桜咲く、春。

あ、ごめんなさい、道間違えちゃいました。

参ったなと照れ笑いをするその顔が愛しくて、心臓がぐぅっと締め付けられる。
初めて会ったあの時から経た彼の顔つきは大人びて、精悍さを帯びながらもあどけなく、青梅のような瑞々しさを放つ。
風に吹かれる漆黒の髪がさらさらと遊び、花びらがふわりとのる。

師匠。

呼ばれて、歩みが止まる。
少年よ、止まるな。進むんだ。

あの、本当にありがとうございました。
いえその、なんというか、どんなふうに言えばいいのかわからないんですけど。

止まるな。捨て置け。その言葉は。

僕、離れてしまうんですけど。

やめろ。言うな。言うな。言うな。
そのまま前を向いて走れ。

このままじゃ、嫌だなって。
このまま、終わりにしたくないんです。

もう少ししたら、もう戻れない。
あと少ししたら、もう終わってしまう。
どんな思いでいつもこの道を共に歩いたか。
その笑顔が眩しくて、目を逸らすくらいに罪を感じて、その胸に抱える両手いっぱいの希望溢れる未来を抱きしめて欲しくてたまらないのに。
だから、言うな。

師匠と過ごした日々は、僕にとって宝物でした。
この人を好きになってしまいそうだって、思いました。
なんでかわからないんですけど、でも直感で。

聞きたくない。聞けない。それ以上言うな。
お願いだから。

ごめんなさい、どうしてもうまく言えなくて、すいません。
毎日がとても楽しくて、でも辛かったです。
だから、このまま師匠とさよならしたくなくて、なんていうか。

駄目なんだ。言うな。その言葉は俺を刺す。
もう、やめてくれ。

師弟の関係はもう、嫌です。

俺はいまどんな顔をしているだろうか。
駄目だ。やめろ。もう。

あなたのことがずっと、ずっと好きでした。
好きです。

むせ返るほどの、桜の香り。
甘くて苦い、春の光。
手を伸ばせば届く距離にある、叶うはずの恋心。

霊幻はそれを緩く笑って、握り潰した。

荒く乱れる吐息と、唸るような喘ぎ声が響く廊下。
耳の欠けた男の身体を使って、霊幻を掻き抱くエクボ。
無骨な長い指が胸や腹を撫で付ける。その感覚に脳髄を支配させて、まるで全てを忘れたいかのようにしがみつく腕。待ってと言いながらも身体は縋る。それに苦虫を噛み潰したような微妙な顔つきをする熱い手の主人。
シャツのボタンを外してネクタイを解き、薄い胸を指の腹が這う。
電気のつかない薄暗闇の中で、窓から差し込む月明かりだけが唯一の光源だ。

「酷くしてくれ」
夕陽差し込む相談所。橙に輝く室内で、黄金色に染まる霊幻が半笑いで事務机から遠くに声を投げるように言う。
ソファで背中越しに聞いていたエクボは、やおら立ち上がって霊幻をじっと睨む。
半目の瞳には光は無く、表情は力無く虚無で、わかってしまう。
ああ、フッたんだと。

「ッあ、ん・・・！」
ご要望通りに陰茎を強く握り込んで、無遠慮に擦ってやる。こんなの痛みしかないだろうにと気にして顔を見るが、本人は感じている様子だ。
色々頭の中をぐちゃぐちゃに駆け巡っているだろうから、敢えて気付かないふりをして存分に責め立ててやろう、と切り替える。

冷徹に、冷静に、ただ忘れるためだけに快楽を押し付けてやればいいのだ。
先走りの滑りを得てさらに強く擦ってやると、肩をびくりと震わせて呆気なく白い飛沫を散らして、腹とワイシャツをはたはたと濡らした。
頬を赤くして荒ぶる息を整えるようにはふはふと胸を揺らす様を見て、エクボは霊幻をひっくり返して壁に手をつかせ、腰をガッシと掴む。
「ま、まて！エクボ！」
とっくにずり落ちたスラックスをばさりと足蹴にして追いやり、尻肉に引っかかっているボクサーパンツをずりおろす。床にはらりと落ち、足首にかかるだけのそれを取り払うのも億劫で、そのままあらわになった裸の尻をぐわしと指が食い込むほどに掴み、割開く。
「酷くしろと言ってたろ」
準備など全くしていないそこへ怒張をあてがい、ぐぬりと先端を突き入れる。
「いや、違う！こんなのは！」
「五月蝿い」
耳元で唸って、一気に奥まで押し入った。
「が、ッ！あ、ああッー！」
鋭い痛みと共に強烈な圧迫感を叩きつけられて、強く目を瞑って耐える。壁紙に爪を立てて、がりりと引っ掻く。苦しむ霊幻をよそに、気付かないふりをしてエクボは抽送を開始する。ぬるりと感じるわずかな滑りは、おそらく血だろう。
「あっ、あ、あぅ」
無理矢理に挿入された怒張に犯されて、痛みの中にもしとやかな快楽を見つけようと躍起になる。痛いだけでは思い出も苦くなる。思い出したくないから、日常にある気持ちよさを追って、見つけて、割って溶かして混ぜ込む。
そう、これは日常のこと。
とある日の昼下がりに起きた嫌なことを解消するために、仲の良い友達に打ち明けて飲みに行って次の日忘れるような、そんな感覚なんだと言い聞かせる。

そんなわけ、ないだろう。

「ッモブ・・・！モブう・・・！」
呻くように押し殺した声で、喉から吐き出される名前。壁紙をガリガリと掻きながら涙をぼろりと溢して、エクボに腰を委ねる。
「すきだよ・・・ごめんなぁっ」
鼻声で弱々しく喚くのを聞いていられなくて、強く穿つ。ガツンと、まるで目を覚ませとでも言うかのように。
「はっ、ぐぁあ！」
ほんのりと主張する前立腺を抉って、奥まで突いて、ぐったりと項垂れた陰茎を擦る。痛みも本音も何もかも、ぐちゃぐちゃに掻き混ぜてしまえばもう、何もわからなくなって、多分そこにいる意味しか考えなくなるはずなのだ。そう感じて、エクボは霊幻を犯す。

ガキをあやす役割は御免だと思ってたが。

「はぁ！あ、も、やめ、っ！」

なかなかこいつは、いい匂いがする。

「ああああ！」

俺様のものに、したい。

2度目の吐精をして、壁にバタバタと吐き出される白濁。
鈴口からは涎を垂らすかのように、粘度の高い白がゆったりと糸を引いて、床にほたり、と落ちていく。
エクボのそれも霊幻の体内にたっぷりと注ぎ込まれて、血液と混ざり合ってぢゅぶりと淫らな音を立てた。
「・・・ぅ・・・」
無理矢理ながらも絶頂を迎えた身体は支える脚力を失って、ぐたり

と膝を砕いてよろける。股に腿を差し込んで倒れ込むのを防ぎ、壁にもたれかかる霊幻を見やる。
赤くくすんだ目が、失恋と肉体の痛みで潤み、まつ毛をしっとりと湿らせている。
エクボがずるりと陰茎を引き抜くと、ごぽ、と嫌な音を立てて、薄紅色に染まった白濁が暗がりの中、霊幻の尻をどろりと穢した。
無言で抱き上げて、風呂に霊幻を押し込む。

「全部、洗い流してこい」

バタンと浴室のドアを閉めて、自身のそれをティッシュでぐしぐしと拭って着衣を整える。
壁越しに響き始めた、水が床を打つ音に混じる微かな嗚咽を聞き流しながら、エクボは窓を開け放ち、ベランダで煙草を燻らせる。
暖かい、花の香りの混ざる甘酸っぱい春の風。
そこに一筋の煙草の苦味を加えつつ、ニヤリと笑う。

いまなら、落とせるんじゃねえかな？

クツクツと笑う悪巧みの滲むその顔で、密やかに的を絞り、確実に仕留める策をそれは楽しそうに練るのだった。